17．保安林に対する住民の意識とＰＲ効果

市浦営林署　○　安保　静雄
菊地　　準

はじめに

国有林野事業，特に保安林・治山事業について，地域の住民がどのように理解しているかアンケート調査を実施した。また，ＰＲ効果を高めるため，地元中学校の協力を得て，保安林ＰＲ看板の製作を実施したことについて報告する。

アンケート調査は，管内の市浦村役場職員，小泊村役場職員と市浦中学校の協力を得て実施した。

看板の製作は市浦中学校にお願いした。製作のねらいとしては，感受性の鋭い中学生の感覚で絵を描いてもらうことと，看板製作を通して，子供が家庭に帰って保安林のことを話題にすれば家族にも理解されるし，子供たちが大人になってから「思い出」として残ればその効果は大きいと考え取り上げた。

1　研究の方法と経過及び結果

（1）　市浦中学校における看板製作と森林教室の実施

森林教室，原画コンクールと入選者等の表彰，特選画を看板へ描画，ビデオ・写真による記録等 実施した。

ア　森林教室について

海岸防災林造成現場で市浦中学校生徒を対象として，森林，特に保安林・治山事業を主体とした内容の森林教室を開いた。

当日は日本海から吹きつける風が強烈であったため，治山工事で造った土塁（人工砂丘）を屏風代わりにし実施したが，マイクの音が消されてしまい，学習にならなかったので看板を立てる予定の松林へ移動した。ここでは防風林のお陰で風は気にならなかった。

生徒たちは身をもって防風林のありがたさを体験できたと思う。

後日談で「防風林の効果を身に染みて実感した。」と校長先生が話をしていた。

イ　看板製作について

（ア）原画コンクールを実施するにあたり，営林署では口出ししないこととし，生徒たちの自由な感覚を表現してもらうこととした。

（イ）全校生徒参加の協力を得，この中から数点の入選作品を選び，局治山課の意見も参考にし，１点を採用した。

（ウ）看板への描画は，先生の指導のもとに５人の入選者の手で行われた。

（エ）看板完成後，参加者全員には参加賞を，入選者及び学校にはそれぞれ賞状・感謝状及び記念品を，真新しい看板の前で授与した。

（２）　アンケートの実施

森林の働き，林業等の設問について，市浦中学校には，学習の結果どのように変わっていくのか調べるため２回，市浦・小泊役場職員には住民であるばかりでなく，自治体の行政マンとしてどれくらい理解しているかを調べるため１回 実施した。

ア　設問は「営林署を知っているか」，「営林署の仕事」，「保安林の種類」，「保安林をどのようにして知ったか」，「治山施設の津波に対する効果」を用意した。
そのほか，「治山事業で今後実施したら良いと思う意見や提言」を書いてもらった。

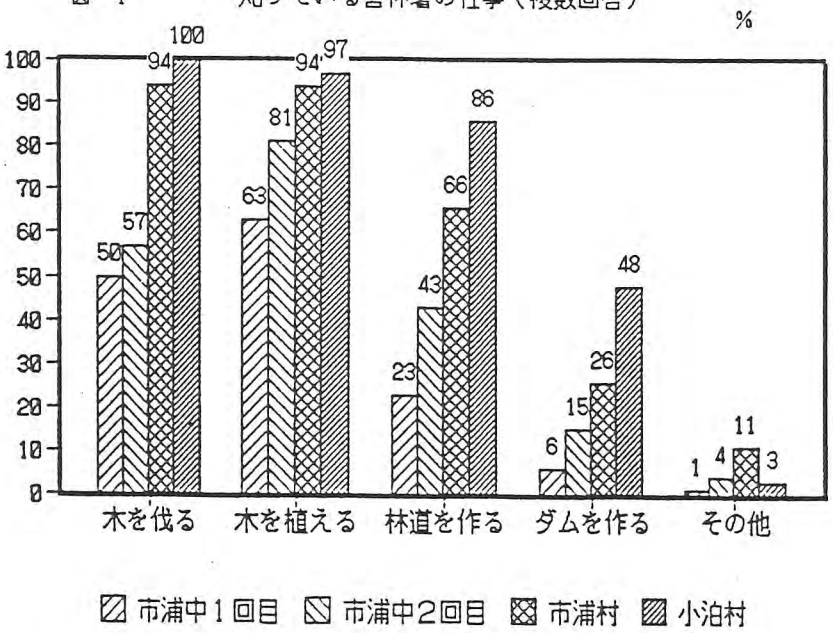
イ　「営林署を知っているか」では，市浦村・小泊村役場職員とも１００パーセント，中学校の１回目は８０％，２回目は９２％と答えている。

ウ　「営林署の仕事」（図－１）について

（ア）役場職員が高い数値を示し，中学生は低い数値である。
小泊村役場職員は小泊村の国有林野率が高いということや身近かな所で治山工事が実施されていることなどから市浦村役場職員より高い数値になっているものと思われる。

（イ）市浦村中学校については，森林教室や看板画の取組みなどから，１回目より２回目の数値が高くなったものと思われる。

図－1　　知っている営林署の仕事（複数回答）



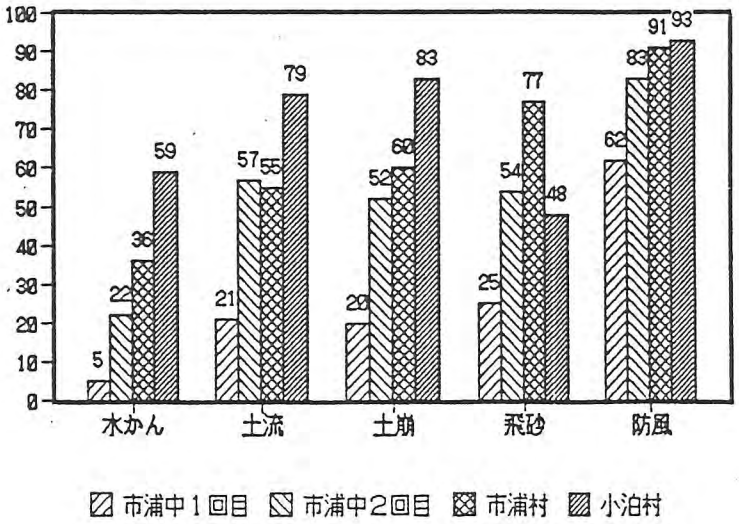
エ　「保安林で知っているもの」　（図－２）について

市浦村役場職員は，防風保安林を９１％，飛砂防備保安林７７％とよく知っている。このことは，市浦は風が強く飛砂に悩まされていることからだと思う。

小泊村役場職員は，防風保安林を９３％，土砂崩壊防備保安林８３％，土砂流出防備保安林を７９％とよく知っている。このことは，小泊村には急斜地や崩壊地が多いことからだと思う。

市浦中学校についても防風保安林６２％，飛砂防備保安林が２５％であり，生活とかかわりの深いものほど認知度が高いことを示している。ここでも，１回目より２回目の数値が高く学習の成果が現れたものと思われる。

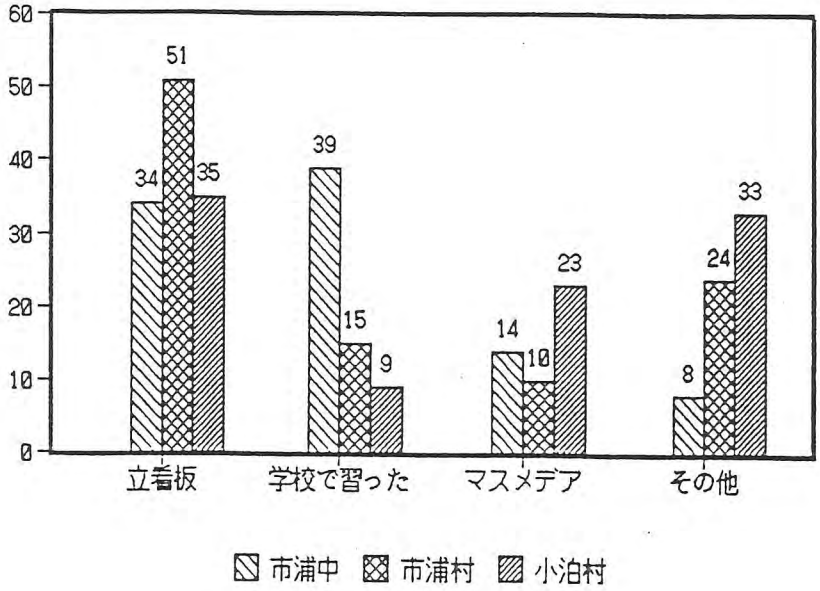
図－２　　知っている保安林の種類（複数回答）



オ　「保安林をどのようにして知ったか」　（図－３）について

役場職員は「立て看板」が一番多く，中学校では「学校で習った」が一番多くなっている。

図－３　保安林をどの様にして知ったか　%



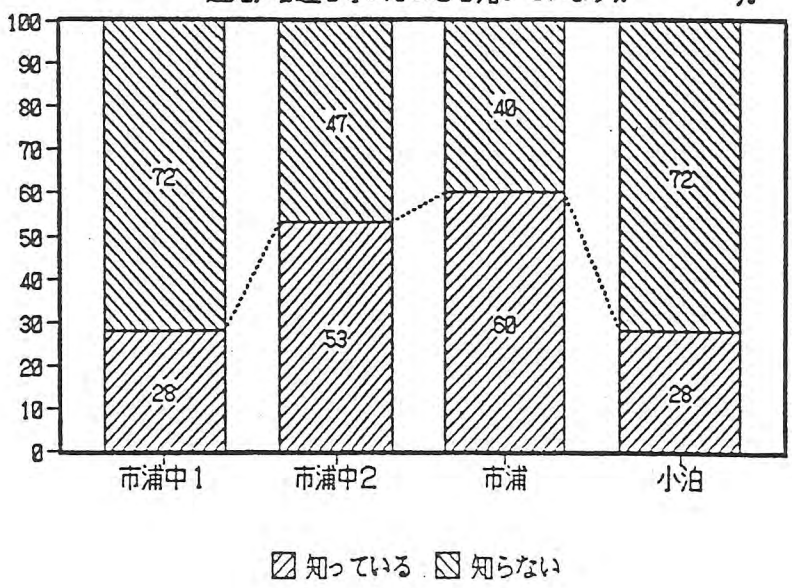
カ　「治山施設の津波に対する効果」（図－４）について

市浦村役場職員は６０％，小泊村役場職員は２８％である。

市浦村役場職員が特に高いのは，昭和５８年の日本海中部地震の際津波による大きな災害が発生し，十三湖河口でも釣り人数人の尊い命が奪われるということがあった。

この時，治山施設の土塁（人工砂丘）と防風林のおかげで難を逃れた人々もおり，治山施設が人命や村民の財産を守ってくれたということからと思われる。

図－４　津波の際，人工砂丘や森林が人命道路，家屋を守ったことを知っていますか　%



なお，市浦中学校の１回目は２８％，２回目は５３％であり，学習の成果が現れたものと思われる。

キ　「治山事業の重要性を住民に理解してもらうために，営林署でどのような事をしたら良いか」に対して寄せられた意見・提言

（ア）　中学校１回目

「植物や木，人工砂丘を大切にする」，「災害のとき役に立ったという例を見せれば良い」，「看板をつくる」

（イ）　中学校２回目

「看板をたてる」，「木を植える」、「小，中学校にもっと協力してもらったらよい」，「災害の事例をＰＲすればよい」

（ウ）　市浦村役場職員

「看板の設置」，「パンフレット，広報の発行」，「イベントの開催」，「モデル保安林の設定と林間開放」，「保安林の場所，種類を示した地図（略図）を住民に配り周知する」

（エ）　小泊村役場職員

「立て看板」，「パンフレット配付」，「学校など教育機関，各種団体を通じてＰＲせよ」，「急斜地の工事を進めてほしい」，「ダム等防災工事」

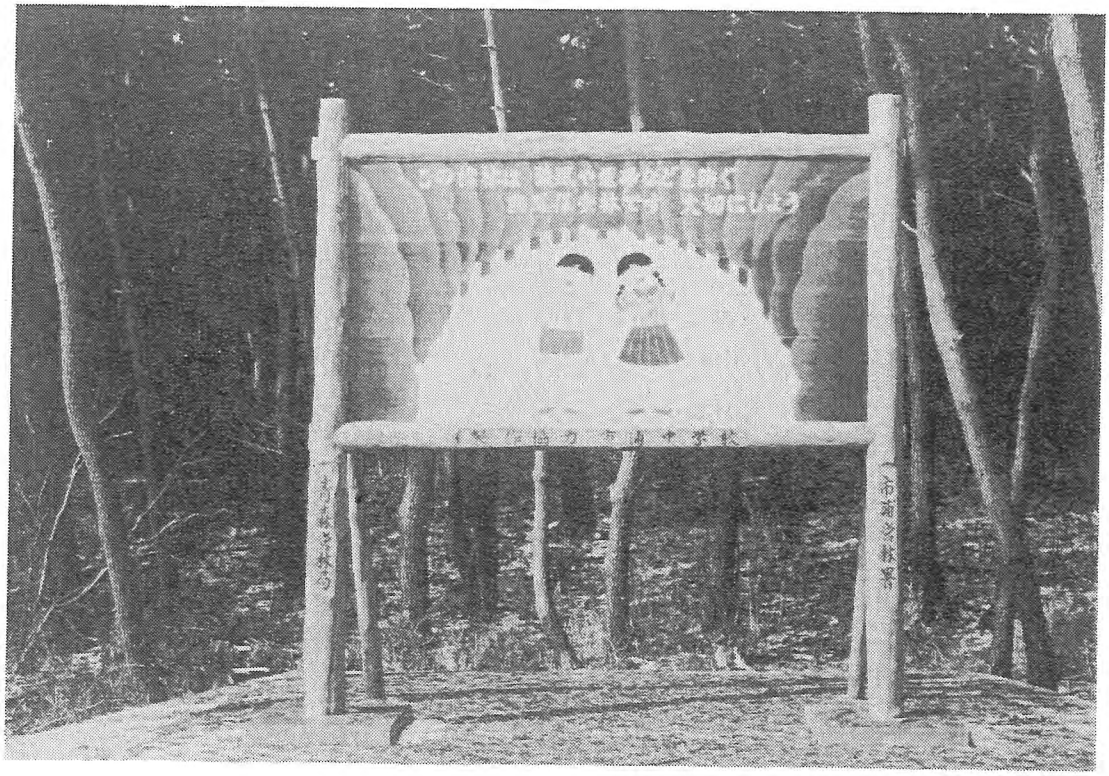
ここで紹介したもののほか数多くの意見や提言をいただいている。

2　まとめ

今回の取組により，十分とは言えないが当営林署管内住民の保安林に対する意識の程度を理解することができた。また，中学生に対して森林教室，看板製作のお願い等の取組により，ある程度の効果が現れることも理解できた。

アンケートについては，今後観光客なども含め広範囲に実施してデーターを積み上げ業務に活かして行きたい。

中学校に作ってもらった保安林の看板は大変評判がよく，「画のデザイン，描画も素晴らしい，場所もよい。」と観光客はじめ多くの方々から称賛されている。

この取組を通して，地元の中学校と深いかかわりを持つことができたこと，役場職員の考えている一端でも知ることが出来たことを大切にし，今後の業務運営に役立てて行きたい。

完成した保安林の看板